
レーマン教授の不思議なお話し。

影法師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レーマン教授の不思議なお話し。

【Nコード】

N5542D

【作者名】

影法師

【あらすじ】

レーマン教授の研究所に足を運ぶ琢磨。いつものように話を聞きにきたようだ。今日はどんなはなしをするのかな？

レーマン教授の不思議なお話し　　優希のお話し

「やあ、また君かい？」

「だってひまなんだもん」

学校なんてつまんないし、家にかえつてもやることがない。ゲームも飽きたし、マンガなんて数えきれないほどよんだ。やることといったらつまらないテレビをだらだらみるだけ。それだったら教授の話を聞いていたほうが100倍ましだし。

というわけで今日も僕こと田中琢磨は教授の研究所に来た。教授はいつも研究所でなにやら難しいことをしている。

「教授うゝ、今日もなんかお話ししてよお」

「うゝん……。毎日違う話ばかりしていると、こっちもネタがなくなるんだけどな。……。そうだつ、ある少年の話しをしてあげよう」

教授はなにかを思い出すかのように右上に視線を置いた。

ちなみに教授はかなり若い。……。と思う。なんせ年を聞いてもはぐらかされたり、流されて結局わからずじまいになってしまふのだ。教授の助手に教授の年を聞いてみたが助手もわからないみたいだった。しかし、史上最年少でなんかの博士号をとったということを知っただけでも大きな収入だった。

「うんつ、してして！」

僕はそう促すと、教授は教授がいつも僕に話を聞かすときのあの独特な雰囲気空間を作り上げた。

ふわーんというか、落ち着くというか、まあとにかく僕はこの雰囲気がとても好きだった。

教授は視線を僕に戻すと、静かに語り始めた。

ある少年がいました。その少年は自分が大嫌いでした。自分のなにからなにまで嫌いで、もう本当に嫌いで嫌いで仕方がありませんでした。

「やあ、ゆう坊。また今日も1人ぼっちかい？」

少年の名は優希。女らしい名前ですが、れっきとした男です。優希は自分の名前も嫌いでした。

「教授だっていつも1人ぼっちじゃん」

二人はお決まりの言葉を言い、沈黙。

もともとあまりおしゃべりなほうではない二人はすぐにこのような沈黙になってしまうのです。

教授が先に口を開きました。

「ゆう坊は自分のどこが嫌いなんだい？」

「全てだよ」

「そんなに自分が嫌いなのに、自殺とかは考えないの？」

「もちろん」

「なんで考えないの？」

そう疑問を振りかけると優希は当たり前のように、言いました。

「自殺するひとは自分が大好きだからだよ。」

「……？。なんで自殺する人は自分のことが好きってわかったの？」

「だって自殺は現実逃避の頂点じゃん。嫌な現実から逃げ出す行為が自殺でしょ？嫌な現実つてのは必ず自分が主体となって初めて現れるんだ。自分が傷つくのが嫌だから逃げ出す。つてのが現実逃避でしょ？それって自分が好きな証拠じゃん。結局自分が可愛いから、逃げるんじゃない」

ゆう坊は自分が嫌いでした。今も嫌いです。そしてこれからも……

「はいつ、これでおしまい。」

「よくわかんなかったし、つまんないよ」

教授の話はいつもこんなかんじで終わる。全然面白くないし、よくわからないことがほとんどだ。そして話が終わると、教授は必ずこう言うんだ。

「まあ、そのうちわかるさ。」

そのあと必ず僕はこう言う。

「また来ていい？」

そしたら教授は必ずこう返す。

「ああ、いつでもおいで。研究所は君を待ってるよ」

レーマン教授の不思議なお話し　～太郎のお話し～

午後4時20分。

いつもこの時間に琢磨はこの研究所のドアを叩く。

トントン

ほらね。どうぞ、と僕は促すと、予想通り琢磨　田中琢磨
がどこかと入ってきて、そのあと遠慮がちにこちらへ歩いてくる。

どうしたんだろ？らしくない、と思ったすぐ後、原因なるものがわかった。

今、僕が椅子に腰掛けている隣に、新しく入ってきた新入り研究員がいるのだ。おそらく、琢磨はこの新入り研究員に人見知りしているのだろう。

琢磨が人見知りの気があるなんて、初めて知ったな。

琢磨は新入り研究員の立っている反対側に立ち、耳元で僕に囁いた。

「この人だれ？顔が怖いんだけど……」

僕は思わず笑ってしまった。人見知りじゃなくて、ただ怖かっただけだったのか。まあ確かにこの新入りはコワモテタイプだ。それも無理はないな。

このままでは、琢磨と会話もままならないので、ひとまず新入り研究員を帰らした。

どうせ、役に立たないしね。

「今日もまた話を聞きに来たのかい」

めんどくさそうなふりをしながらそう尋ねた。

「だって家にいたってやることないし……」

「テレビとかみればいいのに」

と、俺が呟くと、

「テレビより教授の話を聞いた方がいい。」

とかわいいことを言ってくれる。

「しょうがないな……それじゃあ今日はある少年の話をしよう」

と言って、僕は琢磨に限らず誰かに話を聞かすときの、僕特有の独特な空気を作った。

そういえば前に、琢磨はこの空気が好きとか言っていたな。

ふと琢磨を見ると、わくわくしながら純粋な目で、僕の瞳を捉えている。

こんな目をされては焦らすことなんてできるはずもなく、僕は静かに口を開いた。

「太陽が海に落ちるころ、小さなジャングルジムの上で、少年は泣いていました。」

僕はとりあえず名前を聞いてみることにしました。

「君はこの辺の子かな？名前はなんていうの？」僕がそう問いかけてみると、少年は涙を拭いて、こちらを向きました。

「僕の名前は村田太郎。僕の家はここから徒歩数分の所にあるよ。」

教授は、次になんで泣いているかを聞きました。

「どうして泣いているの」

「怖いから泣いているんだよ」

教授は太郎の落ち着きはらった態度に驚きました。しかし、顔には出ませんでした。

「どうして怖いのか」

「人が死んだんだ」

太郎の意外な発言に教授は驚きました。しかし、顔には出しませんでした。

「それは、誰かな」

教授は聞いた後後悔しました。もし太郎が今の発言でまた泣いてしまつかと思ったからです。しかし、太郎はそんなことはなく、威風堂々としてました。

「知らない。ニュースで見たんだ」

「なんで、他人が死んだのに泣いているのか」

「怖いからだよ」

意味が分からない。子供というものは抽象的に話すから詳しく聞か

ないとわからない。全く、面倒な生き物だ。と教授は改めて思いました。

「なにが怖いんだい」

「とりつかれるのが怖いんだよ。背後霊とかが怖いんだよ。」

「それが、死んだ人を見て泣いているのとなにか関係があるのかい？」

「僕は死んだ人が僕にとりつかないように泣いてたんだよ。」

太郎はそう言いました。教授は、成程。そうゆうことだったのか。と納得しました。でもなんで太郎は泣いたらとりつかれずに済むとおもったのだろうか。という新たな疑問が生まれてきました。

「どうして泣いたら、憑かれないで済むと思ったんだい？」

教授が思ったことを口にする、太郎は大人らしい表情で答えました。

「前に、友達に大切な宝物を壊されちゃったんだ。そして僕が怒ったら、その友達は泣きながら僕に謝ったんだ。そしたら、急に怒る気が削がれちゃって、結局そのことは許したんだ。」

朝、ニュースを見て、交通事故で死んだ人がいたんだ。僕はそれを見て、

「バカだな」って言ったんだ。そしたら母さんに

「そんなこと言ったら事故にあった人にとりつかれちゃうよ」って言われたんだ。

それ聞いたら急に怖くなって、どうすればとりつかれないかな。って考えたんだ。そしたら、あの友人のことを思い出して、泣いたら許してもらえる、とりつかれずに済むと思ったんだ。だから・・・

「

太郎はそう話した後、また泣き始めました。

嘘の涙は本当の涙より純粹なのかもしれない。。。

・・・

「はいっ、おしまい。」

僕は話をやめ、独特な空気を解放した。

琢磨はよくわからなかったのか、首をかしげたまま動かない。

「はい、もう話しは終わったんだから帰った帰った。」

僕は琢磨にしっしっ、と手を振り、帰れとサイン。

「よくわかんなかったよ。」そう琢磨が言うと僕は決まり文句を言う。

「まあ、そのうちわかるさ。」

そして、琢磨が決まり文句を言う番。

「また来てもいい？」

「ああ、いつでもおいで。研究所は君を待ってるよ。」

レーマン教授の不思議なお話し　　く太郎のお話し　　（後書き）

いろいろ、ミスがありました。　　一話よりはるかにわかりづらい
と思われます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5542d/>

レーマン教授の不思議なお話し。

2011年1月5日14時25分発行